パネル

新宗教文化の脱教団的展開

— 思想としての教祖研究 —

永岡 崇

宗教集団の教祖伝は、教団や信仰当事者によって著されるものと考えられがちだが、ジャーナリストや研究者を含めた多様な人々が教祖とされる人物について語る行為を広く教祖伝ととらえるべきだろう。そうすることで、教祖について語るといふ行為が、宗教集団やその信仰を再生産するだけでなく、むしろ集団の一体性を攪乱する場合もあることや、教祖イメージが教団の外の社会に流布することによって新たな意義が見出されるケースがあることなど、教祖伝の多様な性格を理解することができると思われる。

本稿では、こうした広義の教祖伝のうち、一九七〇～八〇年代の宗教研究者による教祖研究を取り上げ、その文化的意義を検討する。教祖研究を新宗教文化の一環をなすものとして考察する上では、それぞれの研究者が位置する社会的・政治的文脈や学問的系譜を理解することが必要なのはむろんだが、そうした社会的・学問的背景が、研究者がテキストを作り出す技術的手続きのなかで、いかに表現されるかという点にも着目する必要がある。具体的な理論や方法を記述・分析することによって、なんらかの形でそれらを継承している現代の宗教研究の文化的特質を問うという課題にもつながるはずである。

安丸良夫は、徹底した史料批判と神をなおの無意識と読み替える手法により、出口なおを信徒たちから分離し、絶対的な「外部」から近代天皇制、資本主義社会を批判する教祖を造形した。また島菌進は、中山みきがいかに神意を内面化し、信仰を形成していったかを跡付けているが、信徒らによって語られるみきについての伝承を重視し、共感を寄せながら論述を行っている。学術的な問題設定が当事者たちの信仰から無関係に存立するのではなく、それに根拠づけられるものであるとする認識がそこにはある。

川村邦光はW・リップのカルスマ理論を援用して新宗教教祖の誕生過程を叙述しているが、否定的なレッテル貼りを行う社会的な他者と対峙しながら自己変革を行う主体として教祖を描き、終わりのない非日常的なカルスマ化過程のなかに、教祖とその集団が存立する根拠をみている。また荒木美智雄は、金光教祖の周縁性・境界性を重視し、教祖の「宗教的自叙伝」から周縁的・境界的な性格を奪う教団のあり方を批判している。

こうした教祖像は、戦後の左翼文化史のなかに位置づけうるものだろう。一九六〇年代まで、左翼の活動家は大衆社会の「外部」に自らの身を置いて、「内部」の大衆に覚醒を呼びかける「前衛」としての立場を保持しようとしたが、七〇年前後には、左翼運動自体が経済的恩恵を受ける市民としての自覚をせざるをえなくなり、「外部」を夢想することは困難になっていった（五十嵐恵邦「任侠から実録へ」『文化／批評』冬季号、二〇〇六年）。教祖を信徒たちも含めた日常性から分断された「外部」として描こうとする安丸、荒木、川村の教祖研究もま

た、こうした「前衛」的文化と構造を共有している。だが、こうした教祖像もやはり、大衆消費社会におけるリアリティを喪失していくことになるだろう。それでは教祖研究のなかに、「内部」・日常性における対話を志向する方向性はないのだろうか。この点で示唆的なのは島蘭の教祖像で、テキストの「作者」へのノスタルジアは稀薄で教祖と信徒とのつながりを重視する作品となっている。島蘭は信仰当事者によって共有された伝承を用いながらも、解釈のレベルで信仰者への批判を行い、対話を目指そうとしているともいうことができ、ここに信仰者と非信仰者との間に呼びかけと応答の関係が生じる可能性を見出すこともできる。安易な日常化・制度化を拒む「前衛」型教祖像の批判力は依然として重要だが、信仰者との対話を通して教祖像のあり方を再考し続けていくことにこそ、思想としての教祖研究の現代的意義が認められるのではないだろうか。

稿本天理教教祖伝の成立

幡 鎌 一 弘

天理教教祖中山みきは、教義的に、親神天理王命の顕現である「月日のやしろ」、陽気ぐらしへの信仰的歩みの手本という意味での「ひながたの親」、そしていまなお存命で働いているという「存命の理」で説明される。天理教教会本部の権威本として編纂された伝記が、『稿本天理教教祖伝』（以下『稿本』）

であり、約半世紀にわたって蒐集された史料・伝承などを素材として叙述された「教義書」である。一九五二年前半に草稿が作られてから、一九五六年に完成するまでに、章立て・叙述がかなり変化している。

そもそも『稿本』編纂当初は、文献史料に基づき政治史・宗教史と関係付けた歴史的理解と「おふでさき」の解釈による教義的理解との葛藤があり、そのなかで教義的理解が研ぎ澄まされ、教義を基にした神学的歴史叙述が行われるようになった。そのため、『稿本』では、政治・社会構造などとの関係は全く述べられず、事実の提示に終始する。代わって『稿本』第八章「親心」になるような教義説明や（第十一稿から）、『稿本』第五章に示されるような「つとめ」の意義など（第十四稿から）が新たに書き加えられ、強調された。歴史的理解の後景化は、「ひながた」の非歴史化・非政治化を図りながら普遍化するもので、かわって、「ひながた」の一貫した姿勢として、救済と救済の手段としての「つとめ」の完成が重視され、教祖の多様なエピソードを纏め上げる叙述の柱になった。文献学的手法もとられる一方で、教義的判断をもとに史料が選択されたり、あるいは一部を書き改めたりした。採用されなかった史料の多くは、『稿本天理教教祖伝逸話篇』へ振り向けられた。

史料が書き改められた例が、天保九（一九三八）年の啓示の言葉である。従来からも指摘されているように、『稿本』の特徴として、立教の前後で中山みきの人生を断絶させているが、立教を冒頭に配置する叙述は第八稿からで、史料に準じた表現から、史料をもとにしつつ教義によって構築された『天理教教